

South Sudan

【南スーダン共和国】
写真・文＝久野 真一（JICA広報室）

平和の光の射す方へ



スーダン共和国と国境を接する、南スーダン共和国北部の都市マラカル。開発が遅れがちな地方都市だが、人々は力強く生きている。ナイル川での水くみ、洗濯を終え家路に着く少女たち



a



b

地球ギャラリー vol.42

a. マラカルの河川港。港と呼べるほど十分な設備はなく、専ら人海戦術。側には、紛争の影響で地元から逃れてきた国内避難民のテントが張られている
 b. 国内避難民だった家族。スーダン共和国からマラカルを経由してジュバへ向かう船を待つ。南スーダン共和国の独立後、スーダン共和国に逃げていた多くの国内避難民が南スーダン共和国へ帰還している。「自分の国」に帰って来た安心感からか、表情は穏やか

2011年7月9日、アフリカ54番目の国として独立を果たした南スーダン共和国。首都ジュバから約650キロ北にあるマラカルは、南スーダンの第2の都市ではあるが、ナイル川沿いの小さな地方都市で人口は約14万人。スーダン共和国と国境を接する、アッパナイル州の州都でもある。国境付近では、独立から数カ月が経過した現在も、両国の衝突が散発的に起きている。一方で、街中は自動車も少なく、馬やロバで荷車を引く人たちが行き交

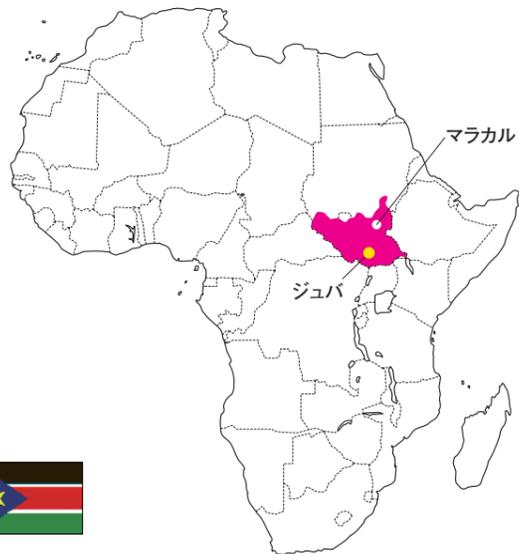
う、のどかな一面もある。南北分離前のスーダン共和国は、政権を握る北部のアラブ系イスラム教徒とその抑圧を受けた南部のアフリカ系キリスト教徒が対立し、20年以上もの間、内戦状態にあった。1983年に勃発した第2次内戦が05年に停戦されるまで、マラカルは北部の軍事基地がある最前線だった。そのためか、街の中心にはモスクが建ち、アラビア語表記やイスラム風の衣装を着た人が目立つ。首都ジュバとは違い、文化の交流点のようにも感じる。



炭をいかだに乗せ、ナイル川を航行する船をバックに、アラブ系、アフリカ系の顔立ちをした少年が仲良く遊んでいた



南スーダン共和国にはキリスト教徒が多いが、独立前は北部にイスラム教徒が多かった影響が、立派なモスクが目につく



首都：ジュバ
 面積：64万km²(日本の約1.7倍)
 人口：約826万人(2008年)
 言語：英語、その他部族語多数
 宗教：キリスト教、伝統宗教
 1人あたり国民総所得(GNI)：1,165ドル(2009年)
 経路：直行便はなく、ケニアなどでの乗り継ぎが一般的。
 通貨：南スーダン・ポンド(SSP) 1SSP=約25.5円(2012年2月現在)
 気候：熱帯気候に属し、乾期(12~4月)と雨期(5~11月)に分かれる。雨期にはスコールのような強い雨が降り、年間降水量は800~1,500ミリ。



スーダン共和国からガソリンの供給が止まっている。カバーがかぶせられ、閉店中のガソリンスタンド



【上】給水設備の管理が不十分であるため、衛生的な水を得ることが難しい
 【左】マーケットの一角。「銃の所持禁止」のマークを各所で見る事ができる



遅刻した生徒たちが先生から「愛のむち」を受ける。まだたくさん生徒が後ろに続いている

南スーダン料理 ヤギ肉とオクラの煮込み 「バミヤ」



昨年7月に独立した南スーダン共和国では、多くの人々が「ジュバアラビック」と呼ばれるアラビア語の方言を話し、イスラム圏の香りが残る。その影響は食文化にも色濃く、豚肉料理が少ない代わりにヤギ肉が好まれる。さらに、南北に流れるナイル川で捕れる魚や、市場に並ぶオクラ、タマネギ、ナス、トマト、モロヘイヤなどの野菜を炭火で煮炊きして食べる事が多い。
 一方、地理的にケニアやウガンダなど6

カ国に隣接することから、アフリカ東部の食文化にも通じるところがある。例えば主食はケニアでよく食される、トウモロコシの粉を湯で練って団子状にした「ウガリ」。また、トウモロコシ粉(またはキャッサバ粉)を水に溶いてクレープ状に焼いた「キスラ」なども広く好まれている。

代表的なおかずは「バミヤ」と呼ばれるオクラ料理。すりつぶしたオクラとヤギ肉を煮込んだもので、食感はとろみ強い「あんかけ」。そのまま食べてもおいしいが、トマトやタマネギを入れたり、スパイスを加えたりと、家庭ごとにアレンジするのが南スーダン流。作り方も簡単なので、ぜひ一度挑戦してみてもいい。



南スーダンでは手で食事をします。「バミヤ」は手のひらでウガリと合わせてから口に運ぶ

- 【材料(2人前)】
 オクラ15~20本(みじん切りした後、適度にすりつぶす) / ヤギ肉150g(細切り) / ニンニク1片(みじん切り) / タマネギ半分(みじん切り) / コンソメ2分の1個 / 塩コショウ適量 / 油大さじ2杯 / 水適量
- 【作り方】
1. 火にかけて鍋に油をひき、ニンニクを炒める。香りが出たら、タマネギを加え、あめ色になるまで炒める。
 2. 1にヤギ肉を加え、表面の色が変わるまで炒める。具材がひたひたになるぐらいの水とコンソメを加え、弱火で煮込む。あくをとり、水加減を調整する。
 3. 肉が十分に柔らかくなったらオクラを加え、焦げ付かないよう小まめにかき混ぜる。
 4. 十分にとろみが出たら、塩コショウで味を整えて出来上がり。
- ☆ヒツジ肉や牛肉でも代用可。



主要な交通手段はロバ。川沿いで地盤が緩いため、雨期は自動車が立ち往生する



廊下にベッドが並ぶ外科病棟。院内は清潔に保たれている

しかし独立後、南スーダン共和国の各地方都市では復興が遅れている。同じ国だったスーダン共和国からの主要な物流が停滞。そればかりか、国際社会の援助は首都ジュバに集中しているため、格差が広がりつつある。道路はほとんどが未舗装で、5月から11月の長い雨期は軟弱な地盤が自動車の通行を困難にする。特に、ナイル川流域の大湿地帯「スッド」が広がるジュバとマラカルの間は道路建設も難しい。ジュバに集まる物資を国内各地に運ぶためには、ナイル川の水運整備が重要なことから、日本は05年から協力している。

また、紛争で土地が荒廃して、古くは盛んだった農業も衰退し、食料自給率はわずかに40%台。工業はもとより、ほかに産業が発達しているわけでもなく、市場に

並ぶのは隣国のケニアやウガンダなどからの輸入品だ。

四半世紀近い紛争を経てようやく独立を勝ち取ったものの、まだまだ課題の多い南スーダン共和国。石油資源をめぐる国境未定の問題も残されている。また、同じアフリカ系でも、ディンカ、シルク、ヌエルといった数十の民族が混在することから、争いの火種を増やさぬよう政権運営においても民族間バランスが重要だ。一つの国家に属する「南スーダン人」として互いに協力し、地方も含めた国全体の発展が望まれる。

南スーダン共和国の歩みは始まったばかり。世界一若い国を世界中が支え、一歩一歩、平和の光の射す方へ進んでいってほしい。

インフラ整備と 人材育成の両面から 国づくりを支える

長年の内戦の末、2011年に独立を果たした南スーダン共和国。JICAは、インフラ整備、農村の人々の生計向上、そして農業が国を支える産業に発展することを目指して支援を行っている。



[上] JICAの支援でジュバ河川港に35メートルの
棧橋とクレーンが新たに設置された



[下] 棧橋の整備がまだ進んでいないところでは、船を川岸に直接つけ、人力で荷物を運ばなければならない



北部に位置するマラカルの街中。まだ都市と呼べないほどインフラの整備が遅れている

20年以上に及ぶ内戦が終結し、2011年7月、新国家として歩み出した南スーダン共和国。一からの国づくりとして、国際社会の支援を受けながら開発が進められているものの、いまだに多くの面で課題を抱えている。

特に、国づくりの基礎となるインフラ整備が十分ではない。その一例が港湾だ。南スーダン共和国では、生活用品をはじめ多くの物資をスーダン共和国からの輸入に頼っており、その主要な輸送手段として、スーダン共和国側のコスティ河川港と南スーダン共和国側のジュバ河川港を結ぶナイル川を利用している。しかし、このジュバ河川港は、港といっても棧橋などの設備があるわけではなく、船はただ土が削られただけの川岸に乗り上げ、樹木に係留し、板で岸と渡して人が荷物の積み下ろしを行っていた。しかも、港を維持管理するための人材や機材も不足。そのために作業効率が悪く、港の処理能力も限られていた。

JICAは独立前の06年から「ジュバ市内・近郊地域緊急生活基盤整備計画調査」を実施。ジュバ河川港に35メートルの棧橋と荷物を積み下ろすためのクレーンを設置したことで、月間の貨物取扱量は3,000トンから7,000トンに増加した。またハード面の整備に加え、2011年からは「内水輸送管理運営

能力強化プロジェクト」を開始し、ソフト面での支援も強化。施設の維持管理や貨物取扱量の把握などが適切に行えるよう、研修を行い港の管理組織の職員の能力強化を図っている。

一方、インフラ整備はジュバとその周辺のみならず、北部の主要都市マラカルでも必要とされている。70年代、マラカルは州都の一つとして開発が進み、上下水道や道路、港湾などのインフラが整備された。だが内戦の影響で荒廃し、ジュバから地理的に離れているため独立後も整備が遅れ、住民の生活に支障が出ている。特に浄水・給水施設が足りないこと、道路の舗装率が5%に満たないこと、雨水排水網が機能していないことなど、社会・経済インフラの不足が目立っている。そこでJICAは2012年2月より「アッパーナイル州マラカルタウン社会経済インフラ総合開発および緊急支援計画策定プロジェクト」を開始し、都市開発のマスタープランづくりを支援している。また、緊急性の高い港や給水施設、道路の整備については、今後プロジェクトの中で具体的な支援を行うことも検討している。

こうしたインフラ整備に加えて重要課題となっているのが、農村部に暮らす人々の生計

手段の確保だ。彼らの多くは内戦中、国内や海外での避難生活を余儀なくされており、その間は農業技術が継承されてこなかった。そのために農業は衰退。結果として、食料のほとんどが国際機関からの援助や近隣国からの輸入でまかなわれている。そうした状況を受けJICAは09年、「ジュバ近郊の平和の定着に向けた生計向上支援プロジェクト」を開始。農林省に対する農村開発政策の策定支援を行ったほか、ジュバ近郊に設置されたモデル農村での活動を通じてコミュニティ開発官や農業普及員の指導能力強化を行い、村人の農業技術の向上を支援してきた。

また、南スーダン共和国で農業開発が重視されているのは、もう一つの大きな理由がある。実は同国は歳入の98%を石油に頼っており、それ以外に産業がないのだ。そこで同政府の当面の目標は、食料安全保障の観点から農業を発展させること。そして、いずれは農作物を輸出して国の収益に貢献できればとも考えている。こうした方針を踏まえ、JICAは南部の都市イエイの農業研究センターで南スーダンの土壌に適した稲品種の研究を行うためにJICA専門家を派遣するほか、農業政策の全体像を具体化するためのマスタープランづくりにも協力していく予定だ。



[左] 農業を通して住民たちの生計向上につながるよう、農業普及員とともに日本人専門家が農業技術を指導
[右] 実験農場では技術を教わりながら、村人たちが共同で農作業を行う